

---

# 元彼徒然草

ゆきかおり

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

元彼徒然草

### 【Nコード】

N4607E

### 【作者名】

ゆきかおり

### 【あらすじ】

主人公のりかは仕事の事や結婚の事で悲観的になり、彼氏がいないが元彼に電話をしてしまった。元彼に再会する事になり、親から彼氏まで巻き込んでしまう騒動を起こしてしまう。

## 第1話

8年ぶりに元彼に電話をかけてみた。プッププツツ…ツルル…ツルル…。

「はい」

あの人の声だ。

私は第一声がスムーズに出るよう意識して軽く息を吸う。

「もしもし。ひろし？私。りかです」

「えっ…？りか？」

一瞬沈黙が訪れた。私のこと、もう覚えていないよね…。

「赤羽にいたりかです。」

「赤羽にいたりか…、りか…りかつて、ああ、あなただったの！」

私は思い出してくれた事でウキウキした気持ちになってきた。8年前に本気で好きだったひろし。忘れた事なんかはない。

「ふふ…、思い出してくれた？りかです。お久しぶり」

「ああ、あなた、懐かしいねえ。生きてたの？」

「当たり前じゃない。ひろしは？お元気？今電話していて大丈夫なの？」

「大丈夫だよ」

ひろしは設計屋だから、私と付き合い合っている時も家か会社で図面を書いている事が多かった。

「もうあれから何年？10年？」

「ヒドイ。10年も経ってません。8年ですう」

「ああそう。俺は皺が増えたよ。痩せたしね」

「年令からくるものは仕方ないよ」

当時ひろしは43歳、そして私は23歳。不倫だった。

「5年前に離婚したんだ」

「嘘っ！絶対ひろしは離婚しないと思っていた」

本当に驚いた。ひろしは

「俺離婚する気はない」と断言していたから…。

「離婚して、嫁に全部くれてやって。娘もいなくなって、飼ってた犬にまで逃げられたよ」

「信じられない」

「今嫁がどこにいるかも知らないし。今は独身ですよ。」

「私も独身です」

ひろしには絶対家庭があると思っていたから、今電話する時もとても真剣な気持ちで電話をした。そうしたら独身と分かり…。

## 第2話

私は32歳のこの年まで独身でいた事を嬉しく思った。そして本当は付き合ってる彼氏がいるけど、その人の事は忘れてひろしとの会話にのめり込めんでいった。

私は会社を辞めたばかりで、彼氏は転勤で九州へ行っていたから、東京で一人暮らしをしている私には時間が余っていた。

ひろしとの会話が楽しく、ひろしから、

「今度ゆつくりお会いしましょう」

と言われた時は、

「じゃあ、今日！」と笑顔で即答してしまい、

「今日はダメなんだなあ。お客さんと会う予定があるから」

と、からかい気味の口調で言われた事すら、内心残念に思いつつも昔に戻って楽しくお話ししてると感じた。

ただ、彼氏のユウキと違う点は…、ユウキは私から電話をすると私の電話代を気にして必ず掛け直してくれる…。

ひろしとは30分位話をしてるが、掛け直してくれる事に慣れてる私には、人からかかってきた電話でひろしからの話メインの長話のできる事に、ひろしのそんな姿勢に正直心の隅で小さな疑問を感じた。

ユウキに甘やかされてるのかな？とも思い直し、ひろしにも、

「そつちからかけてもらったのに、長くなつてごめんね」

と言われ、

「私からかけたんだから大丈夫よ」

などと言い、再会をお互い約束して電話を切った。

52歳になったひろしは、8年前と変わらない声で…。ひろしがたくさん自分の話をしてくれたお陰で、ひろしの状況がかなり分かった。

ひろしの状況はかなり分かったけど、ひろしは私には状況や近況を

訊ねてこなかった。

ひろしは飲み屋のお姉さんとの付き合いが本当に多いから、多分、女性の状況等を聞く事を失礼に思ってるのかもしれない。

私はひろしに優しさを感じてしまい、ひろしに思い切って真剣に電話をかけて本当に良かったと感じた。

会社を辞めてから私の部屋は乱雑になってきたが、ひろしが来るわけがないのに、それを期待しながら片付けを始めた。

### 第3話

乱雑になっていた私の部屋に、ひろしとの電話のあとは、窓から光が差し込んだような気すらしてしまった。

私は、ゴミを捨て、物の片付けを始め、インテリアについてまで考え始めた。

付き合っただる彼氏、ユウキとの4年の付き合いは、私には疲労感が心の中に溜まって澱のようになってしまっていた。

ユウキとの結婚を何度も夢見た。2年前、私のマンションは部屋の更新があった。私は、ユウキが更新に合わせて結婚してくれるという期待を持っていた。

現実には、ユウキは新居探しをしてくれたが、新居も決まらず、ユウキが更新料を私の代わりに払ってくれ、結婚の話は伸びた。

私は、それが辛かった。

好きな人との新しい生活に一定の水準など求めてなかった。狭くて古いところでも、好きな人との新生活に不満など感じるわけない。

住むところなど最初は大したことないところがいい。二人でお金を貯めて少しずつアップグレードすればいいのだ。私とユウキのような庶民ではアップグレードにも限度があるがそれでいいのだ。

ユウキが当時言っていた事が、今もよくわからない。

「何度も引越したくないから、一生住めるところを探してる」と言っただけ探していた物件は賃貸物件で、私は賃貸物件で一生住む感覚がよくわからず、この人は結婚する意思がほんにあるのか大いに疑問を持った。

私がいくら意見や感情を述べたところで、主導権はユウキにある限り私は待つしかない。

ワンルームマンションの一室で私は何度、女としての惨めさを味わっただろう…。

ユウキがなんで私と付き合ってるか、それすらも分からなくなった。

次に惨めさを感じたことは、ユウキとある夜、

「子供が出来たら産みたいな」と言った時だ。

私はその時の言葉を思い出すと心がドアを閉めたような気持ちになる。

「今出来たら育てられないから墮ろして」。

ユウキはその言葉を申し訳なさそうに、でも撤回する意思のない口調で私に伝えてきた。

ユウキは大学を出た後、新卒で今の会社に入社し以来ずっと同じ会社にいる。更に言えばユウキはバツイチで子供は前の奥さんが引き取った。

私には、子供のいる父親が

「墮ろして」などと発言することに二重の打撃を受けた気持ちになった。

## 第4話

私はユウキに

「墮ろして」発言をされ、気が狂うような気持ちになった。まだ子供などできてないのに。

ユウキは仕事の帰りに私の部屋に来たため、私はユウキのビジネス鞆を玄関の外に放り出した。

「帰って」と冷たく言った。

その日、外は雪が降っていた。ユウキはコートを職場に忘れて持っていないかった。

私はコート無しでスーツ姿のユウキを、夜の雪のなか追い返してしまった。

子供の頃、東京では珍しい大雪が降ったことがある。そのときのかすかな記憶が蘇り、頭の中ではまだ終電があるから大丈夫と自分に言い訳をした。

私は煙草をつけ深く吸った。なぜストレスを感じると煙草を深く吸うのか。

ユウキから時折、携帯に着信とメールが入る。

私は確認する気にもならず、2本目の煙草に火をつける。

ユウキと一緒にいたい、家庭を持ちたい、私たちはごく普通に付き合ってるだけだ。なぜ叶わない願いなのか。

ユウキの言い分は、

「実家が今、妹の離婚やら色々ゴタゴタしてるから」だが、それは付き合い始めた頃も聞いてることだ…。

私には、実家のゴタゴタと私たちの結婚がどう結びつくのか理解できなかつた。実家は実家、私たちは私たち。それをユウキにも貫き通してほしいと思った。

ユウキが部屋からいなくなり、感情的になった私も少し気持ちが落ち着き、ユウキからのメールを読むと、

「りかちゃんのそばにずっといるからね」とあった。

私はユウキの携帯に電話をかけた。

「ユウキ？」

「うん」

「今どこにいるの？」

「りかちゃんのそば」

「そばって？」

マンションの近くにいないか？

「ユウキどこ？私そこに行く」

「いい。近くだから…。りかちゃんは家で待ってて」

電話を切ると、本当にユウキはすぐに来た。

玄関のドアを開けると、髪やスーツや手袋が雪で白っぽくなってる

ユウキが立っていた。

「りかちゃん…」

ユウキの消え入りそうな声が聞こえた。

「怖かった…」

ユウキが入り、玄関のドアが閉まると同時にユウキに抱きついて泣いた。

思いきり泣いた。

「雪の中、ごめんね、ごめんね」

## 第5話

声をあげて泣きながらユウキに謝った。

ユウキを雪の中追い返した事は悔やんでも悔やみきれなかった。

悔やむ気持ちを抱える私を、ユウキは頭や背中を撫でてくれた。優しい人なのだと思う。

ユウキとは笑ったり泣いてしまったり、色々なお互いの気持ちを共有し、二人の付き合いは深まっていく一方だったのかもしれない。そう思っていた。が、私の心が乱れる出来事が起きてしまった。

職場結婚を知った時。仕事では私より先の人社だから先輩、でも年は私の下、仕事は出来る彼女が結婚をした時、私は心の中では羨ましくてたまらなかった。

職場で仕事が終わった後、彼女とその彼をよんで皆でサプライズパーティーをおこなった。

彼女は付き合ってから半年位で結婚が決まった。

私にも心から祝福する気持ちはある。

でも、サプライズパーティーでの彼女の嬉し泣きを見ると、私にはそういう出番は無いと思ってしまう落ち込んだ。

その彼女は結婚後も仕事を続け、すぐに妊娠したことも聞き、私はユウキを追い返した夜の事を思い出してしまった。

私だって普通に結婚して子供を産んで家庭を作ってみたい。ユウキとは結婚の話が出ない。

私のことが本気でないなら、違う人と付き合ってほしかった。

私は叶わない願いを持って。ピエロになってしまった。いつまでも滑稽な私を演じなくてはいけないようだ。

泣いた顔にピエロの仮面をかけた。愛の言葉なんか本当に惨めなだけだ。

好きな人と結婚できない。好きな人の子供も産めない。

どんなに辛くても、仕事はしなくてはいけない。

ほかには、仕事を夢中でしていれば、その間は東の間ユウキのことを忘れていられるメリットもある。

仕事が終わって家に帰れば、平和はなく、我にかえり独身の寂しさを一人で実感するしかなかった。

たまに女友達と会うことが息抜きだった。

私は旅行が好きで、女友達と旅行に行きたい話も出るが、実際の旅行はユウキと行く旅行だけ。

ユウキとの旅行も楽しい。私たちは何か一緒にやっってる時は息が合ってるようだ。

結婚は全然息が合わないのが悲しい話だ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4607e/>

---

元彼徒然草

2010年10月21日21時21分発行